文芸研ブックレット 4

国語教育と道徳教育の違い

西郷竹彦

「道徳教育と国語教育の違い」（演題）という捉え方もよいのですが、むしろ、〈関わり〉と言った方がはっきりしてくるのではないかという気がします。〈違い〉というと、違いだけが問題になりそうなので、違いも含めて〈関わり〉という形で話を進めていきたいと思います。

さて、先にちょっと理屈を言って、それから具体的に『あとかくしの雪』と、中学校の教材の『夕焼け』という吉野弘さんの詩を引き合いにしながら、〈関わり〉ということを考えてみたいと思います。

真、善、美、（用、聖）

まず、道徳の問題を考える前に、価値（価値基準）についてお話しします。

価値基準には、真、善、美というものがあります。道徳とか法律というのは善の問題、科学は真偽の問題と真実という問題の二つに分けられますから、真の問題です。美とは美醜の問題、芸術というのは主として美の問題です。他に、役に立つか立たないかという用の価値と、宗教的な意味で聖の価値とがあるのですが、これは今回省いて、真、善、美というこの三つの価値基準の問題を頭において話していきたいと思います。

『真』（法則）とは
人が発見するもの

何が善で、何が悪かということは、人が決めることです。本当か嘘かという真の問題は人が決めることではない。分かりやすく言うと、科学が追及したのは真です。科学が明らかにしたことは、言わば法則と言っていいでしょう。例えば、すべての物はお互いに引っ張り合う力が働いているというのが、万有引力の法則です。地球とリンゴの間にも万有引力の法則が働いていて、お互いに引っ張り合っています。リンゴの方が小さいので、結局、リンゴの方が地球に引っ張られて落ちていくような形になるわけですけれども。

数学の公式で表すことができるような、きちんとした法則に従っているのです。これは科学が追究する真ということです。この場合、それは法則と言います。こういう法則というのは人が決める問題ではない。全ての物と物の関係の中に、ある力が働いていて、人間が決めることでも、作ることでもなく、もともと自然というものの中に最初から内在しているものなのです。そういうものを法則といいます。科学というのは、そういう法則を発見するものです。法則を作るみたいに考えますけど、作るのではない。万有引力の法則というのは、ニュートンが作ったのではなく、発見したのです。万有引力の法則というのは、ニュートンが発見する以前からあったし、そういう法則的な関係で力が働いていたのですが、ニュートン以前の人は、それが分からなかっただけなのです。もちろん、ニュートンが死んでも、今日もなお、その法則はあるというわけですから、法則というのは見いだすもの、発見するものであって、人が作るものではないのです。

『善』（規範）とは人が作るもの

ところが一方で、人間が、必要があって決めることがあります。規範と言います。例えば、日本ですと、左側通行、道を歩く時には、左側を通りましょうというのがあります。これは、決まり、規範です。規範というのは人間が作るというか、決めるものです。

日本語の文法では、『てにをは』の使い方とか、つなぎ言葉の使い方、あるいは文末の過去形、現在形の使い分けとか、いろいろあります。文法というのは、日本語の決まりです。これは、日本人がずっと日本人として、民族として形成されてくる歴史の中でできた一つの決まりです。この決まりを無視すると話が通じなくなる。お互いに社会生活をする上で、言葉なら言葉というもの一つを取ってみても、ある決まりにしたがってものを言ったり、聞いたりしないと通じなくなる。ですから、この規則というのは、一定の社会集団の中で、一緒に生きて行くうえでお互いの間

にいろいろ決めないとうまく世の中が動いていかないということで決める。この決まりを規範というのです。日本語の文法も規範です。日本では日本語の決まりがあります。中国へ行くと、中国語の決まり、文法があります。中国語の文法で、日本語の文法を賄うわけにはいきません。中国語の文法に基づいて日本語をしゃべっても通じません。もちろんフランスへ行けば、フランス語の文法があります

日本の中でもそうです。封建時代は国と国が閉鎖的になっていましたから、隣の国との出入りがなかなか難しい、交通も不便な時代です。まして、政治経済的にも断ち切られている時代でしたから、言葉のうえでも行き来が非常に少ない。いつの間にか、薩摩の国には、薩摩弁というのがあり、肥後の国には肥後弁というのがあって、それぞれ決まりがある。恐らく津軽弁もそうでしょう。津軽弁には津軽弁の決まりがある。

ですから、規範というのは、人が決める、あるいは、決まってきた。だから変わるということがあるのです。あるいは、変え得るということなのです。ここが大事な所です。ある一定集団の中で人が作る、あるいは決める、そして、変え得る、変わるということが規範というものの性質です。法則のほうは人が作るわけではないのですから、変わるということもない。変わることがあってはおかしい。

道徳とは変わるもの

道徳というのは何かというと、規範です。ここをよくわきまえてもらいたいのです。法律もそうです。掟とも言います。掟も法律も道徳もみんな規範です。それぞれの社会、それぞれの時代に、ある人々が決めたこと、作ったことなのです。ですから、時代が変われば変わるし、また変えるということもなされる。憲法だって変わったでしょう。明治憲法を戦後、民主憲法に変えました。変わったのではなく、変えたのです。それにしたがって民法、刑法も変えました。

だれが作ったか、何のために作ったか、これが問題です。

だれが作ったのか、いつ作ったのか、何のために道徳を作ったのか考えなくてはいけません。ですから、道徳教育というのは、始めから、これをきちんとやらなくてはいけません。道徳の本質をまず教えるべきです。それを抜きにして、「こうしなさい。」「あーしなさい。」という方ばかり先行して、どんどん押し付けていくのではなく、まず、道徳というのは、法則と違って、人（特定の個人ではなくある集団）が作ったものだから、何のために作ったのか、だれが得する決まりなのかということを考えることです。ですから時代が変われば合わなくなる。ある時代に、ある社会集団の中で都合がいいように決めたとします。ところが時代が変わったり、社会集団の内容が変わったりすると、その決まりが合わなくなってくる。ふさわしくなくなってくる。不都合をきたしてくる。矛盾が起きてくる。当然こういうことが起こるわけなのです。でも、それをいつまでも持ちこたえようとするのは、保守反動になるわけです。ですから、時代の発展に伴って、道徳規範というものは変えるのです。

例えば、江戸時代は親の仇討ち、主君の仇討ちは美徳とされました。今どき、親の仇討ちといってやったらどうなるでしょう。殺人罪になります。世間には多少、同情する動きがあるかも知れませんが、親を殺されたから子どもは親の仇討ちといって相手を殺したら、江戸時代なら殿様から褒められて金一封か何か出たかも知れませんが、今はそうじゃない。美徳どころか犯罪になる。あまり変わらない、少ししか変わらないどころか、まるっきり反対になることさえある。でも万有引力の法則ががらっと変わるということはありません。アメリカでは万有引力の法則が通じるけれど、中国では通用しないということはありません。これは、時代を越え、社会の体制を越えて、変わることはありません。人が作ったものではないからです。規範は人が作ったものだから、都合が悪ければ、変えていいのです。

人間は一人で生きているわけはなくて、社会を構成して生きているわけですから、一人勝手なことをしたら周りが迷惑するので、最小限、こういうことはやめましょうと決めたことが道徳であり、法律であり、普通、法規といって

いるものです。

善とか悪というのも、結局は人が決めたことなのです。中国で善と思われることも、日本では悪と思われることもあるかも知れません。昔、善だと思ったことが今では悪と思われるかも知れません。

人間というのは、社会的動物、社会的存在ですから、社会の一員として決まりを守っていないと自分がけがをしたり、人に迷惑が及ぶということもあります。それを取り締まるのは、法規です。法規というのは強制力を持つのです。強制力を持つというのは、それを違反したら処罰されるということです。お金を取られるとか、そういう強制的な力で処罰されます。道徳の方は制裁というのが有ります。道徳に反した行為をすると、社会からつまはじきされるというような社会的制裁を負います。

道徳を抜きにして生きられない

さて、それでは道徳教育というのは何をやったら良いのかということなのです。社会というものがある以上、道徳や法律があるのは当たり前です。ただ、その道徳は誰が何のために作ったかという問題はありますが、とにかく、道徳、法律が有るということ、不都合があれば変えるということを前提にしながら、現在ある法律とか、道徳とかいうもの、それを教え、それに従うようにさせる所から、まず、道徳教育あるいは、昔でいえば、修身教育というのが始まったと思います。人間が社会生活をしていく以上、道徳というものや、法律というものを抜きにして、生きていくことは出来ない。道徳を抜きにした生き方ということができないというのは当たり前です。一人で無人島で生きていくのなら必要ないと思いますが。

学級も一つの社会集団です。たとえ、小さい子どもたちであっても、子どもたちが四十人いるということは、一つの社会なのです。学級も一つの集団なので、決まりというものを必要とします。その場合、先生が一方的に勝手に押し付ける決まりもあるかも知れません。また、子どもたち

が自分たちで作る決まりもあるかも知れません。あるいは、先生と子どもたちが一緒になって作る決まりもあるかも知れません。あるいは、一年生が入って来たらとっくに誰かが作った決まりに右ならいして、そこでこうしなさい、ということになっているということもあるかも知れません。いずれにしても、すでにそこに決まりがあって、その決まりに従って学級生活をしていくのです。学校には学校の決まりがあります。いろんな意味で会社にいくと会社の決まりがあり、その決まりというのは善悪の問題になってくるのです。

道徳の決まりというのは、「こうしなさい」ということと、「こうしてはいけない」という二つなのです。単純なことです。ということをだんだん教えていかなくてはいけません。道徳というと、えらく深刻な難しいような、あるいは、道徳なんて全然どうでもいいというふうに極端に道徳を無視するような人がいるけれども、それは間違いです。道徳は無視できない。道徳というものがあるのですから、それを無視して生きていく訳にはいかないのです。少なくとも道徳という決まりがあって「〜しなさい」ということと「〜してはいけません」という二つをいっていることだということをまず押さえておいてください。そして、いけないことをしたら、みんなからいろいろ批判される、法律であれば、処罰される事になるということを押さえておきましょう。決まりに従わなければ、混乱を起こすのです。

本質を分からせる　道徳教育を

さて、そこで、さっき言ったように道徳というのは、時代によって社会によって違う、それは、それぞれの社会集団が自分たちに都合の良いように決まり、道徳を作ったからです。そうすると時代が変わると会わなくなる、不都合をきたす。そこでそれを変えていかなければならない。ところが、変えていくということが先生方にはあまり頭にないのです。道徳というものがあり、それを守るか守らない

かだけの問題があります。しかし、道徳というのは作るのだ、変えるのだという積極的、主体的に考えていかなければならない問題なのです。どうしたらより良い、社会的な人間関係が結ばれるか、どういう決まりにしたら集団がより良く、うまくやっていけるか、こういう立場から道徳を考えなくてはいけません。今までの道徳教育というのは、そこが抜けている。既製の、今ある道徳をどう教えるかをあの手この手を使って、面白おかしく分からせようという努力がされていたのです。道徳というのは、いつでも変わらないものとしてあって、それをそのまま受け入れなさいというような立場でなされてきたと思います。でも、そうではない。道徳というのは、いつでも誰か（人々、集団）が作るものなのです。何のために作るかというと、みんなが幸せに、トラブルなくうまく協力してやっていけるように、そのために最小限この道徳を守りましょう、こういうことをしてはいけないとみんなのコモンセンスで、みんなの常識で作っていこうとしてできたものがこれなのです。けれども、それが世の中の実状に合わなくなったら、集団のあり方にブレーキがかかるようだったら、いつでもそれはさっさと変えればいい、変えていかなくてはいけないものです。こういうふうに、道徳というものの本質を子どもに分からせるというのが、道徳教育の出発点だと思います。

私は道徳教育のいろいろな本を読んでみましたが、一つとしてそういうことを小学校、中学校、高校の子どもたちに分からせようとするものがない。道徳の本質を分からせるということを抜きにして、棚上げしているのが今の道徳教育の実態なのです。私たちの道徳はいつ、どういう形で生まれてきたのか、そしてそれは今の私たちの生活の在り方にマッチしているのか。もしずれているとしたら、どういうふうに考えて、どういうふうな道徳を変えていくべきか。そういう積極的な、主体的な形での道徳観というものが全くと言っていいほどないのです。これは大きな問題だと思います。だいたい道徳というのは、誰かが、いつか決めたものだということすら意識されていないのです。でも、多くの場合、今までの道徳というのは支配階級が決めてきたのです。その社会の上部の階級が自分たちに都合の良い

ように全体の決まりを決めるのです。これが問題なのです。

例えば、封建社会、江戸時代においては武士階級が自分たちの都合の良い決まりを下々の一般、九割何分の民衆に押し付けているわけです。そして、あたかもそれが日本人全体の幸せ、日本人全体のことを考えてできた決まりだというふうに思い込ませているのです。だけど、そうではなくて、親の仇討ちとか、主君の仇討ち等というのは明らかに階級社会における封建的な武士社会のモラル、道徳です。それをみんなに押し付けるというようなこと、それから上下の人間関係をと尊重させるというのがそうです。ですから、一握りの上の階級のものが自分だけの利益のために、全体の決まりを押し付けたということなのです。

それでは、民主主義後の日本の道徳はどうなのか。武士という階級こそ、なくなったけれども、やっぱり特権階級、支配階級というのがあるのです。金の力をもっている資本家、それと結び付いた政治家など一握りの特権的な階級が今度は武士階級にとって代わって、自分たちに都合の良いような道徳、モラル、法律を作って国民全部の決まりとして、国民全部を縛る。国民全部に強制力をもつ道徳、法律として作った。かつて日本の法律を作る国会というものは、ある一定の高額の税金を納めるような人間でないと議員になれなかった。その後で我々の先輩が血を流して、やっと戦いとった普通選挙の権利というものができてきたのです。それでも、まだ、女性の権利というものが認められていない。だから女性も含めての権利のための戦いがなされてきたのです。法律も道徳も結局はその社会を支配する階級の利益に従った法律で有り、道徳なのです。そういう中では支配される貧しい人々のことが無視される法律や道徳だったのです。あるいは、差別されてきた女性も利益や幸せというものが大幅に削減されるような法律や道徳が作られてきたのです。今なお、そういう状態は続いています。例えば、女性にとってどの程度権利、幸せというものを保証できるかというようないろいろな問題があります。だからこそ、みんなの利益、みんなの幸せを約束するような道徳、法律を決めていかなければならない、教えていかなければならないのです。僕は、これが本当の道徳教育だと思いま

す。

ところが、そういう道徳教育はほとんどなされていません。道徳の教科書自体そうです。　そういう道徳教育をもっと、ちゃんとやるべきだと思うのです。

ところが、戦後どういうことが起きたかというと、戦前の修身教育、つまり道徳教育はいけないという考え方です。これが、道徳教育それ自身を否定する考え方につながってきたのです。戦前、戦中の道徳教育は間違っていた、これはその通りです。だから正しい道徳教育を出発させるべきだったのです。ところが、戦前、戦中の道徳教育は間違っていたから、道徳教育がいけないのだと道徳教育そのものを否定したのです。ここに戦後の民主主義教育の一つの大きな誤りがあった。日教組の組合活動もそういう偏向を犯してきた。例えば、文部省は修身という名の元には抵抗がありますから修身という言葉は使ってはいませんが、道徳教育を復活させようとしました。　それは戦前の道徳教育とは違うけれども、やはり、支配階級の都合の良いような道徳教育を復活させ、国民に押し付けようとしてきたのです。それに対して、日教組、その他の人々がこぞって反対した。『道徳教育反対』と、文部省が出してきた道徳教育を否定し、打ち壊すという闘いをしてきた。ところが、その闘いがいつの間にか、道徳教育そのものを否定する闘いになってしまったのです。そういう間違った道徳と道徳教育はいけないということと同時に、それに対してこういう道徳、こういう道徳教育をすることが望ましいし、こういうようなことをやるべきだと積極的な提案をしなかった。そして、道徳ダメ、道徳教育ダメとこれは、もちろん文部省が出してきたものに対して言っている訳ですけれども、文部省の言う道徳教育はダメとはっきり言うべき所をいつのまにか道徳及び道徳教育そのものの否定という形になってしまったのです。そして、道徳及び道徳教育がどこかへいってしまった空白の時代が続いた。多くの進歩的な教師たちは道徳というものにアレルギーを起こしてしまったのです。道徳という言葉を聞いただけで、嫌悪感をもつ。これは大変な間違いです。むしろ積極的に、どういう道徳教

育こそが必要なのかをもっと主体的な立場で取り組むべきだったのです。けれどもそういうことをしないままに今日までずるずるきているのが戦後の民主主義教育の弱点、偏向と考えるます。

国語教育との関係

さて、そこで国語教育との関係を考えてみます。国語教育といっても、言語、文法の指導、作文、説明文といろいろありますから、全般と考えるより主として文芸の分野、物語、詩を扱う分野に限定して考えたいと思います。

先に道徳、道徳教育に対して一種のアレルギー症状を呈している今の日本の教育界の現状に対する分析をしたのですが、そういう状況の中で例えば、私たちがある作品を取り上げて教材として授業をする中で、道徳的な問題が出てきます。なぜ出てくるかというと、文芸作品の中に描かれている人間は、真空地帯に生きている人間でなく、ある人間関係の中に生きている社会的存在としての人間ですから、当然その人間はある道徳的な決まり、規範の網の目の中に組み込まれているようなものなのです。ですから、作品の中の人物が行動するということは、どこかで何らかの形で一つのモラル、道徳に触れてくる。例えば、皆さんが今日これから家へ帰るまでの間で、いろいろな面で社会的な規範とどこかで触れ合っていると思います。家に帰れば父親であり、母親であり、隣の人から見れば隣人であり、学校に行けば、教師であったり、校長であったり、教務主任であったりというようにそれぞれの役割なり何なりをもっている社会的存在なのです。全部、いろいろな意味で社会的な役割を果たすべく位置付けられているのです。ですから、私たちは好むと好まざるにかかわらず道徳的な規範というものにどこかでかかわりながら生きている、また生きざるを得ない。それを無視して、それとは関係なく生きようと思ってもそれは無理です。無人島へ行く以外ない。無人島でなくて社会で生きている以上、どうしてもその社会の道徳、規範にかかわって生かざるをえないということの認識

が必要です。

そうすると文芸作品というのは生きた人間を描きますから、どこかで道徳とかかわりあっている存在なのです。ですからそういう面が大なり小なり表現されてくるはずです。どの作品の中の人物もどこかで私たち人間社会の道徳のある面に触れているはずです。文芸作品というのは人間を丸ごと描くものです。人間は肉体をもったものです。心をもったものです。人間関係をもって、つながりをもって生きている人間を、そういうふうに多面的、多角的、丸ごとに人間を描きますから、そこに道徳の問題が出てくるのは当たり前なのです。それなのに道徳にふれてはいけないのだという道徳アレルギーからそっちに目をつぶって作品の中の人物の生き方を問題にするとしたら、それ自体おかしいのです。ところがなぜか皆さんは、作中の人物の生き方がある面で道徳的なものに触れていて、教師が授業の中でそこに触れて話し合いをすると周りの教師から「道徳教育だ。」という批判がくる。それにおびえてのっけから道徳めいたことには一切目をつぶって授業しようとするような奇妙な状態というのがある。『羹に懲りて膾を吹く』という諺がありますが、戦前、戦中の修身教育批判が道徳、道徳教育そのものを丸ごと否定してしまうように、戦後の民主主義教育を進めてしまったものだから、今言ったようなおかしな状態が生まれて来ているのです。もっと大胆に作品の中の人物の生き方を問題にする時に、その人物の生き方が道徳の問題に関わってくる時に、関わっている形でそういうものとしてとらえて問題にすべきなのです。それを恐れる必要はない。ところがどうも避けて通る。それをまた勇敢に大胆にかかわるとなぜか周りから「そんなものは道徳だ。」とけなされてしまうということがある。人間というのはいろんな関わりをもって生きています。道徳的な生き方もするし、生理的な生き方もする、経済的な面ももっているし、行事的な面ももっているし、様々な面をもって常に人間は、多面的、多角的に生きているのです。

そういう人間を、作者が作品に描くときには、できるだけ丸ごとに描こうとするはずです。ですから、一つの人間というものを描くとき、やはり道徳的な面が書かれてくる。

この書かれてくる比重は小さくても大きくてもいいのですが、しかし、けっして人間を道徳的にだけ描いているのではないのです。ここのところが大事なのです。文芸作品というものは、道徳的にも描いているのです。道徳的な面も、道徳的側面もとらえているのです。しかし、道徳的にだけ描いているのではない。ここのところがはっきり分かれば、いろいろな混乱とか誤解が防げると思います。今起きている国語教育と道徳教育のトラブルは全部解消すると思うのです。

もう一度言いますと、人間というのは道徳的にだけ生きているわけではない。これこそ多面的、多角的な形で生きているのが人間なのです。子どもでもそうでしょう。大人になれば複雑になりますが。それらの間には当然矛盾が起きてきます。そういう矛盾をかかえながら多面的、多角的に生きているという人間のありようをリアルに描いたものが優れた文芸作品というものなのです。そういう文芸作品を教材にもってきて授業するとなれば、当然人間というものをそういうものとして扱い、そういうものとして人間というものを認識させる。それが、私が望んでいる人間観ということなのです。いろいろなつながり、関わりをもって、そして絶えず動いていく、変わっていく、そういうものとして人間をとらえるということです。ですから、当然、文芸作品を扱うとすれば道徳を抜きにし、棚上げするというのはある意味でおかしい。

文芸というのは人間を丸ごと描くところに文芸の独特の立場というものがある。科学というのは人間を丸ごとに認識しない。心理学は人間の心理という側面だけを見る。生理学は人間の生理という面だけ見る。解剖学は人間の解剖的な面だけ見る。科学というもののありようには、科学の可能性と限界もある訳です。文芸が科学と違うところはそこなのです。倫理学、道徳学というものも人間の道徳という面だけを研究する。それぞれ科学というものはそれが必要です。狭いけれども深く見て行くということが必要なのです。しかし、そうだと生理学者は人間の生理のことしか分からず、人間を丸ごとには分からないという困った状態に陥る。

人間を回復する、取り戻すということが文芸、あるいは、文芸教育です。生理学は生理の面だけ、心理学は心理の面だけ、社会学は社会の面だけ、というふうに科学は全部バラバラにしてある側面だけ見ていく。そこに科学の良い面と悪い面が同時に出てくる訳です。ですから文芸教育というものは一方において科学が陥っているバラバラに分解してしまうというものの見方、考え方を総括する、統合する、といいますか、丸ごとつかむというところへもっていく大事な役割があるのです。文芸教材を扱う時に、道徳的側面が描かれているとすれば、当然その描かれている比重において扱っていくという姿勢が大事です。そこだけ扱えという訳ではないのです。何回も言うようにそこも扱わなければならない、そこも含めて人間というものを考えていくということが大事なのです。今や私たちは当たり前の立場に立って、人間を丸ごとにみるというならば文芸作品でも、人間を道徳的にだけ見てはいけないが、道徳的見方を省いてもいけない。道徳的見方をも含めて、人間を丸ごとに見ていこうじゃないかという立場に立つべきだということです。

『あとかくしの雪』
盗み（悪）をどう扱うか

『あとかくしの雪』を読んでください。

ここでよく問題になるのは、この百姓が隣の大きな家の、大根を囲んである所から大根を盗んで来て大根焼きをして旅人に食わしてやるというこのことは、結局盗みではないか。これを許していいのかということです。さて、こういう盗みを授業でどう扱うかということが問題です。

僕はこの教材で二，三回授業をしたことがあるのですが、ある教室で授業した時に、この盗みについて子どもたちが訴えていることは、大根一本だからたいして悪くないのだと、なんとかこの百姓を弁護しようとするのです。分かりますよね。それで僕が反論するのです。

「それじゃ、大根一本ならば、盗みはいいことか。数の問題か。」

と。すると考えますね。

「自分で食べたくて取ったんじゃない。おなかをすかしているであろう旅の人に食べさせるために取ったんだから、動機が悪くない。だからいいじゃないか。」

「それでは、人のためにというのなら、人の物を盗んでもいいのか。」

また、子どもが困ってしまう。なんとか、その盗み、事実を弁護しようとする。そしてだんだん追及していくと、子どもたちは、やっぱり盗みということ自体は悪いのだと納得せざるをえない。盗みは一本という数や量の問題ではないし、あるいは誰のためにということでもない。けっきょく盗みは盗みとしてそれは悪いことなのだと納得せざるをえないわけです。善悪で言うならば、善ではなく、悪です。道徳というのは、善悪を問題にするので、道徳的に言うと盗みは盗み、悪なのです。道徳的には例え一本であろうとなんであろうといけないことです。

というふうにすると子どもはどうしても、やっぱり・・・ん〜でも・・・となる。みなさんもそう言われてしまうと身も蓋もない。なんかすっきりしない感じがするでしょ

う。それはなぜかと言うと、私たちは人間の行為というものを道徳的にも見るけれども、道徳的にだけ見ている訳ではないからです。それは、どういうことかと言いますと、人間の、人間とは限りませんがものごとの価値基準が真、善、美と三つあるとさっき言いました。今、百姓の行為を善悪の基準だけで見るとこれは悪いに決まっています。これを決して教師が「いや、悪くない。」と言い訳してはいけない。悪いのだとはっきりさせる。

しかし、人間を見る時、ここだけを見てはいけないのです。真実の問題、美の問題考えると、この百姓の行為は人間の真実に根差している。人間の真実とは、人が飢えているのを黙ってじっと見ておれない。その真実に基づく行為というものは美の観点から見ると美しい行為なのです。それは、人間の真実に発した行為であり、その盗みを犯してまで、大根一本を盗んで来て、その旅人に食わしてやろうというのは、まさに美しい行為ではないか、というと子どもたちも納得するのです。なるほど、盗みは悪だけれども、その百姓の行為は人間の真実から発したものであり、その行為は美しいと感動させる。

さて、これは一つの矛盾です。悪いけれども、美の行為である。善なる行為が美であると矛盾がない。しかし、悪なる行為が美であるということはこれ自体矛盾でしょう。その矛盾というものがなんか引っ掛かって来ます。その矛盾はいったいどう考えたらいいのか。

さて、そこで最後の行のところにこう書いてありますね。

〈この日は旧の十一月二十三日で〉十一月二十三日とは、特別の意味をもった日です。普通、霜月三日といっています。毎月旧暦の二十三夜は旅にある人々の幸せや安全を願う日なのです。自分の身の上を案ずるのではなくて身内の人の、あるいは旅人の安全や幸せを願う日なのです。その願いがかなえられる日と思われている日なのです。しかも、毎月毎月の二十三夜の中で、特に旧暦十一月二十三日が特別な意味をもっている。特別幸せが約束される日です。

〈今でもこのへんでは大根焼きをして食うし、〉おこわを炊くとは祝福しているのです。なぜ、めでたいこととして祝福しているのでしょう。

〈あしあとがすうっと消えてしもうた。〉とありますね。罪の後を消した。きよめたというくだりがありますが、さて、なぜ祝福するのでしょう。

盗みというのはさっき言いましたように悪ですが、この百姓の盗みは、人間の真実に基づく美しい行為、美である。盗みという悪いことをしたのに、どうしても美しい行為としてとらえられるということ、悪が美であるというのは矛盾ですが、それをめでたいとして祝福している訳です。そこで、考えて見てください。なぜ、この百姓は盗みをしなければならなかったのか。この百姓は貧乏で全く何一つないのに、となりの大きな家は、たくさんある・・・。なぜこんなことになるのか。貧富の差のある社会だったからです。一方に富めるものがあり、一方に一本の大根さえない貧しい生活がある。この階級社会の矛盾がこれを引き起こしている。だから盗みをせざるをえない。人間の真実というのは、飢えている人を何とか助けてあげたいと思う。何とか食べさせてあげたいという人間の真実が盗みという形でしか解決できない。だとすると、なぜ、人々がこれを祝福するかというと、ここに階級矛盾というものを解決する方向をこの話というのは示唆しているからです。この百姓は自分の家にしかるべく畑があって、大根があれば、旅人をもてなすことができる訳です。なにも盗みを犯さなくても、悪を犯さなくても。だから、この悪というものは個人から発するものではなくて、社会のしくみが悪を犯さざるをえない人間のつらさを引き起こしているのです。だから、この百姓の行為というのは、そういう矛盾を暴きだして、こういうことがなくなるためには、どちらの方向を目指すべきかということを実は示唆しているのです。

この話は実は日本の権力によって拷問され、惨殺された小林多喜二のお母さんの話を書いたものなのです。『十一月二十三夜のこと』と書かれたのです。なぜ祝福するかというとここに社会改革、矛盾を犯すことのある人間が自分の真実に根差して生きる、行動するという可能な在り方、方向を示唆しているからです。こういうことを授業するということが文芸の授業です。道徳をふまえながら、道徳を

越える。道徳の教育をきちんとしながら、しかもこれを越えたものになっているのです。文芸というものはそういうものだから、こういう授業ができるのです。道徳教育というものをきちんと位置付けながら、そこだけで終わらないで、それを含んでそれを越える。人間を丸ごとにとらえるということ、人間を歴史的に見るということ、そういう見方、考え方を授業の中で組織していくということなのです。それが私たちが求めている文芸教育です。ですから、私たちが必要としている文芸教育は、道徳や道徳教育をまともに位置付けているのです。

『夕焼け』

自分で自分を責めることの
できる人間の美しさを

『夕焼け』という詩がありますから、見てください。これは中学校の教科書に載っているよく知られた作品です。

これはいわゆる道徳教育の中で考えるとどんなことになるか、私たちが人間を丸ごとにとらえる見方でみるとどういうことになるか考えてみてください。

どこかで見ているような、よくあること、ありそうな風景ですね。自分でもこれに似た経験をしたことがあるでしょう。

よく車内で起こり得るちょっとしたことです。たいしたことではないが、年寄りと若い者がいて、若い者は座っているけれど、年寄りは立っている。なんとなく若い者が席を立って譲ることが道徳的であるという感じになっています。しかし、これは、考えてみると席を譲らなければならないということになっている訳ではないし、決まりとしてある訳でもないし、道徳的とまで強く言われている訳でもない。席を譲った方がよかろう、席を譲るほうが美しいではないかという程度のことであろうと思うのです。さっきの盗みの問題と違って日常よくあることで、特別それが良いとか悪いとか目くじらを立てるほどのことではない、ささいなことです。

ささいなことだけれども、この娘は自分が最後に立たなかったというか、立てなかったことを、人から責められるのではなく、自ら自分で自分を責めているという姿がある。これはもう道徳の問題ではなくて、人間の生き方の問題です。ここで使われている〈受難〉という言葉を考えてみて下さい。普通、外から難を受けることを〈受難〉というのです。自分が第三者や他の状況からある被害を受ける、これを〈受難〉というわけです。ところが、この『夕焼け』の詩の中では世間の常識で言う受難とは違う。自分の優しい心に自分が責められるということを〈受難〉と言っているのです。つまり、詩人、吉野弘は世間の常識的な受難という言葉の意味をひっくり返して、自分で自分を責めるその〈受難〉を問題にしているのです。どういうことかと言いますと、こういう場合に自分を責めない人もいる。平然として座って何も感じない人もいる。ちょっと後ろめたい、なんとなくこそばゆい気持ちであるけれども、別に自分で自分を責めるという事のない人だって結構いる。それはまた、世間的には何も責められる問題ではないという人もあるし、一方では若い者がそれに気づかないのはけしからんという人もいるでしょう。良いじゃないか、若い者だって仕事をしていれば疲れるのだから、そういう時間帯に年寄りが乗っていることが間違っているとか、いろいろあります。

何年か前に新聞の読者欄でこういうことが問題になったことがあります。そして、ちょっとした投書がきっかけで、いい若い者が、年寄りが立っているのにすわっているというのは見苦しいと書いたら、つぎの若い人が、それは杓子定規だ、若い者だって、元気であるけれども会社が終わってもうくたくたな身を運んでいる時もある。そういう時に年寄りに席を譲らなければならないというのは杓子定規だ。第一、急な用事であれば別だけれど、年よりはそういう時間を避けて乗るほうが良いのではないかと。いろいろありました。まあ、考えてみると、夕方でしょう。夕方というのは、のほほんと遊んで帰って来たのかも知れませんが、もしかすると、常識的にはオフィスか、工場か何かで働いて、帰りの電車で結構それなりに疲れているだろうと思わ

れます。

そうするといちがいに責められない。第三者が責めるとか責めないという問題ではありません。ここで問題になっているのは、第三者が娘の行為をとやかく言うという問題ではない、これを言い出したらきりがない。まただいたいどうなのかは分かりません。この娘は疲れていたのか、疲れていなかったのか、あるいは、案外、体の不自由な娘であるかもしれない。これは分かりません。問題は、これを見ている話者の僕がその姿をどう意味付けているかというと、ああ、この娘はうつむいているところを見ると、せっかく美しい夕焼けなのに、その夕焼けも見ないで、そうやってうつむいたままずっと乗り続けている。あの娘は優しい心をもっているだけに自分の優しい心に自分が責められる。そうしてつらい思いをしている。つまり、自分で自分を責めることのできる人間の美しさを問題にしているのです。

だからここでは、道徳の問題ではなくて、人間の美を描いている。結局、文芸作品というのは、一口で言うと、人間の価値基準の美が決め手になるのです。美が、究極の価値基準になっている。道徳の問題を棚上げしているのではなくて、道徳の問題をまともに取り上げながら、それを美の問題として描いている。道徳的問題にするべきではない、むしろ、美の観点から、その人間の心のあり方をこういった形で評価しようと、する作品もある訳です。

最後に

というふうに文芸というものは、道徳の枠内で考えられるものではなくて、道徳の問題を含んで大きく、高い次元で考えられなければならないものなのです。それが、私のいう文芸教育と道徳教育の関わりなのです。その関わり方がどうなのかということが一つ一つの作品において、ケースバイケースでちがいますけれども違いが問題になるのでなくて、関わりが問題になるのです。最初にぼくが『国語教育と道徳教育の違い』という演題を与えられたのですけれども、むしろ『文芸教育と道徳教育の関わり』というふうに言い換えて話をしたいと言ったのはそういうことです。

（一九九一年十月五所川原市　北五教育会館）